

## 論 説

## ナチスによって断頭台へ送られた修道女

——シスター・マリア・レステイトゥータ——

伊 藤 富 雄

## 目 次

|                      |
|----------------------|
| はじめに                 |
| シスター・マリア・レステイトゥータの経歴 |
| 事件の概要                |
| 獄中のレステイトゥータ          |
| 列福・列聖へ               |
| おわりに                 |

## は じ め に

1943 年 3 月 30 日、ナチスに併合されていたオーストリアのウィーンで一人の修道女が国家反逆罪でギロチンにより斬首された。敬虔な神のしもべとして、また病院の腕利きの看護婦として、およそ政治活動とは無関係に生きていた修道女が、どうしてそのような恐ろしい終焉を迎えざるをえなくなったのだろうか。ドイツ国内、あるいはナチスに併合されていたオーストリア国内で反ナチ抵抗運動をおこない、逮捕・処刑された犠牲者の数は数万人に達する<sup>1)</sup>。そしてその中にはドイツの告白教会のボンヘッファーに代表されるような、反ナチ抵抗運動のために逮捕・処刑されたキリスト教徒や神父、牧師も多数含まれてはいる。しかしながら修道女が、それも反ナチ抵抗運動とは無関係の修道女が残虐なギロチンによる斬首の刑を受けねばならなかったのはいかなる理由からなのだろうか。

私がシスター・マリア・レステイトゥータの存在を知ったのは「オーストリア抵抗運動記録文書館」館長のノイゲバウアー教授を通じてである。ノイゲバウアー教授の論文や「オーストリア抵抗運動記録文書館」の記録文書や資料、シスター・マリア・レステイトゥータが所属していた修道会が編纂した資料集などを元に、秘密国家警察による彼女の逮捕、民族裁判所による裁判、ギロチンによる処刑、そして戦後の名誉回復とバチカンのローマ法王による列聖・列福までの過程を調べ、まとめたものが本稿である。

1) Neugebauer, Wolfgang: Widerstand und Oposition. In: E.Tálos/E.Hanisch/W.Neugebauer/R.Sieder (Hrsg.): "NS-Herrschaft in Österreich". Wien 2001, S.207.

ノイゲバウアーによれば少なくとも 2,700 名のオーストリア人が積極的な反ナチ抵抗運動のために逮捕・処刑されている。また政治的理由から拘留された 10 万人のうち、強制収容所や獄中で命を落としたものは 23,000 名にもものぼるといふ。

## シスター・マリア・レストイトゥータの経歴

シスター・マリア・レストイトゥータ、俗名ヘレーネ・カフカはチェコ人のアントン・カフカとマリア・シュテーク夫妻との間に 1894 年 5 月 1 日、チェコのモラヴィア地方のブリュン（フソヴィーツェ）で、夫妻の 7 人の子供の第 6 番目として生まれている<sup>2)</sup>。5 月 13 日、ブリュン・オプロヴィッツのマリア昇天司祭館で洗礼を受ける。

貧しい靴職人だった父親は当時の多くのチェコ人同様、家族を養うために 1896 年にウィーンに移住、1906 年にはウィーン市民権を獲得している。

ヘレーネは 1905 年 5 月に初聖体拝領、同年小学校に入学。3 年生の時に一度転校している。小学校時代の成績はほぼどの科目も「可」であり、特に目立った生徒ではなかった。

ヘレーネの小学校時代、ヘレーネは「吃音」に悩んでいた。とりわけ興奮した場合や、他人から乱暴に話し掛けられた場合などに、すらすらと言葉がでなかった。彼女が通っていた学校の女性校長は教育的経験から、この哀れな少女には才能があることを見抜き、3 ヶ月間、特別クラスに送り込んで治療を受けさせる。3 ヶ月の間に彼女は一言もしゃべることが許されなかったが、幼い彼女は頑張り通し、完治する。このことは背が低くまるまると太っていて、後年には体重 100 キロを越えるまでになっていたヘレーネが、その外見とは異なり生まれつき繊細で、周囲の粗野な振る舞いに特別に敏感だったこと、また粘り強く、頑張り通す性格であったことを物語っている。

当時の貧しい家庭では一般的だったが、カフカ家でも子供たちは義務教育しか受けなかった。ヘレーネはしかし義務教育の後、さらに 1 年間家政婦学校で学んでいる。その後幾つかの家庭で家政婦として働くことになる。1911 年、17 歳の彼女はウィーン 2 区レオポルトシュタットのタバコ屋の売り子として働くことになり、毎日多くの様々な階層の客たちと話しを交わしていく間に、彼女の世界は次第に広がっていく。

1913 年、ウィーン 13 区ラインツの市立病院で臨時の看護婦として働く決心をする。この病院では「キリスト教の愛のフランツィスカーナ修道院」所属の修道女たちが看護婦として働いていた。この修道院はウィーン 5 区のハルトマン小路にあったので一般的にはハルトマン修道院と呼ばれていた。

修道女たちと毎日接触する内に 19 歳のヘレーネは修道女になりたいという願望を強く抱くようになる。未成年の彼女は修道院に入るために両親の同意を必要としたが、両親は修道院に

---

2) Beinhauer, Edith : Schwester Restituta. Ein Leben für Kranke und Schwache. Verlag KIRCHE Innsbruck, Innsbruck, 1998, S.12f. 「レストイトゥータ協会」の事務局長も努めている著者のバインハウアー氏からメールを通じてレストイトゥータに関する様々な資料・情報を送って頂いた。ここに深く謝意を表したい。またレストイトゥータの伝記はこの論文に負うところが大きいことを付記しておく。なお「レストイトゥータ協会」のメールアドレスは「[www.restituta.net](http://www.restituta.net)」である。

入るのを許可しなかった。思い悩んだ末、ヘレーネは決断し、両親の元を離れて修道院に逃げ込んだのである。結局両親は同意せざるをえなかった。

正式に修道女と認めもらうために、ヘレーネは「修道志願見習い期間」として1914年4月からほぼ1年間、ラインツの市立病院と老人ホームで働くことになった。この見習い期間の終わりに試験が予定されていた。修道院に入ろうとする動機が本物であるか否か、家族が宗教的であるか否か、志願者が従順な性格であるか否かが試されるのである。

ヘレーネの宗教心と信念は固く、試験に合格する。ヘレーネは次の段階の「修練期」を迎え、着衣式で初めて修道服を身に付ける。修道服は「衣服としてキリスト」を身に纏うことを意味し、それ以降は二度と元の平服を着ることは許されないという。1915年10月の着衣式で、ヘレーネに初期キリスト教徒の殉教者「シスター・マリア・レステイトゥータ」の修道女名が与えられる。これ以降、ヘレーネはシスター・マリア・レステイトゥータと呼ばれることになるが、「レステイトゥータ」とはラテン語で「(救世主によって)復活した女性、(救世主のもとに)帰された女性」という意味であると言う<sup>3)</sup>。

修練期はほぼ1年続き、聖柩の前での静かな祈り、聖母マリアの崇拝、ロザリオを繰り返しながらアヴェ・マリアを唱える、といった宗教的な学習だけでなく、病人の看護などの業務もおこなう。レステイトゥータは聖母マリアへの深い愛の念が生まれ、毎日マリアに祈り、自分の部屋にマリア像を置いて、就寝前には毎日「7つの苦悩のアヴェ・マリア」を唱えたという。

1年後の1916年10月、修道誓願式を終え、レステイトゥータは晴れて修道女として修道院に迎えらるることになった。

修道女としての彼女の最初の職場は低地オーストリアのノイキルヘン病院の外科病棟だった。数ヶ月後にラインツの病院に戻り、2年間、肺病が猛威を振るっていた内科病棟で勤務に就く。

1919年5月、ウィーン近郊のメードリンク病院で緊急に手術看護婦が必要となった。その外科の主任医師は有能ではあったが、神経質で、すぐに看護婦を怒鳴りつけるので、看護婦仲間では恐れられており、誰も長く勤まらなかったのである。ある看護婦はその時のことを振り返ってこう述べている。

「メードリンクには非常に乱暴な主任医師が働いていました。彼の元に留まりたいと思う看護婦は誰もいませんでした。その時にレステイトゥータなら彼と上手くやっていけるのではないかと、試してみようと言うことになり、彼女がメードリンクへやってきたのです。果たして彼女は彼と上手くやっていったのです。」<sup>4)</sup>

---

3) ebd., S.19.

4) ebd., S.21.

なぜレスティトゥータに白羽の矢が立ったのだろうか。彼女は有能で、あらゆる困難にも恐れることなく立ち向かい、また患者に対しては、常に思いやりのある慈しみに溢れる態度で接していることが評価されていたからである。さらにレスティトゥータはしばしば率直な意見を述べ、自分が正しいと思えば恐れることなく反論し、治療や看護の改善のためにさまざまな提案もおこなっていたという。外科の主任医師とは「取っ組み合いの喧嘩」をしたこともあったが、すぐに彼の片腕として信頼を得ていくことになる。

1923年6月、レスティトゥータの永遠の請願修道式がおこなわれ、最終的にキリストと繋がった印として、彼女は金のリングを受け取った。レスティトゥータの指からそのリングが外されたのは彼女の処刑後のことである。

1930年、新しい外科部長がやってくる。彼は後にメードリンク病院の院長も勤めることになる。

彼はレスティトゥータを完全に信頼し、手術室では自分の「片腕」として、看護婦の資格を越えた権限を与えている。また個人的にも親しくなり、レスティトゥータは彼の4人の子供の面倒を見たり、熱心なキリスト教の信者ではなかった院長の子供たちに祈りを教えている。

彼女は次第にメードリンク病院で中心的存在となり、患者や看護婦たち、さらに若い医師までが助言を求めにやって来るほどだった。多くの人たちが彼女に対して敬意を払ったが、時には看護婦だけでなく、医師までも厳しくしかりつけることもある彼女を恐れる者たちもいた。またレスティトゥータには非常に大胆な面も見られた。彼女は院長の末の子供に密かに洗礼をほどこしたのである。神父の許可は得ていたものの、院長には内緒だった。そのような彼女をレスティトゥータをもじって「レゾルータ」(大胆な女性)と呼んでいた看護婦仲間もいたらしい<sup>5)</sup>。

レスティトゥータは病院内で患者に心を尽して看護しただけでなく、患者が退院した後も、自宅まで赴いて面倒を見ていたという。患者に絶大な信頼を得ていた彼女に対し時に軽い妬みや嫉妬心を抱いた医師や看護婦がいても不思議ではない。

手術室の控えの間で喫煙した医師から罰としてビール数箱の徴収を提案、実行に移したレスティトゥータを苦々しく思う医師たちもいた。中には彼女を病院から追放しようと動いた医師もいたが無駄だった。院長が彼女を第一手術看護婦として自分の側に置くことを強く主張したからである。

レスティトゥータの唯一の楽しみはグーラシュを食べながらビールを飲むことだった。彼女は病院のすぐ近くにあった行き付けのレストラン「グスタンツル」に週に1,2回は足を運び、つかの間の休憩時間を楽しんだという。

---

5) ebd., S.23.

病院の医師や看護婦の全員がカトリック教徒だったわけではないが、カトリック教徒ではない者たちも病院内の宗教的な行事は中立の態度で許容していた。しかしながらナチスによる権力掌握後、状況は変化した。

「オーストリアのナチスが権力を掌握する以前はレスティトゥータや修道女たちと医師や世俗の職員たちとの関係は非常に良好でした。まるで家族のようでした（。。。）ナチスの権力掌握後は（。。。）状況は全く恐ろしいほど変化しました。わたしたち修道女は病院から追い出され、〈褐色の〉看護婦に取って替われそうになりましたが、わたしたちは病院に留まることができました。院長が、ハルトマン修道女がいなければ業務の遂行ができない、と主張したからでした（。。。）しかしながら医師や職員の中にはナチ党员やナチスを歓迎している人たちもいました。」<sup>6)</sup>

レスティトゥータは反ナチスの態度を明白にしていた。彼女にとって信仰は不可侵のものであり、宗教上の理由からナチズムを拒否したのである。それゆえ信仰が問題となると、ナチスに対しても明け透けに意見を述べたのだった。そうした彼女に、ナチスの報復があるので口を噤しむように忠告してくれるシスターもいたが、彼女は耳を貸さなかった。

シュトゥムフォール医師が公然のナチ党员で、かつ元ナチ親衛隊員であったことは病院内では周知の事実だった。彼はナチ党内での自分のキャリアを危険に晒さないため、かなり以前から準備していた自分の子供の洗礼を突然拒否したこともあった。そうしたナチ党员シュトゥムフォール医師とレスティトゥータの間に深い溝が生まれるのも当然である。手術室に君臨するレスティトゥータの意見を彼が怒りと共に甘受しなければならぬこともたびたび生じていた。またある時、彼が激しく異議を唱えたにもかかわらず、レスティトゥータは塗油式を拒否された瀕死のポーランド人の両手に自らの十字架を握らせ、その男性が亡くなるまで静かに祈りを捧げたのだった。彼は怒り狂った。かくしてシュトゥムフォール医師は、密かに復讐の機会を窺い、至る所で聞き耳を立て、スパイを配したのだった。

ナチスの医師とシスターたちとの亀裂はますます大きくなっていった。ナチスの医師は死につつある患者に秘蹟を授けるために司祭を連れてくることを許可しなかった。シュトゥムフォール医師の医局では、患者自身が明白に意思表示しない限り、司祭を呼ぶことができなかった。

1940年、メードリンクの病院に新病棟が完成した。その頃すでにナチスは学校や病院など、公共の建物から一切の十字架を撤去する命令を下していた。しかしレスティトゥータは新たな

---

6) ebd., S.28.

病棟のために大胆にも自ら十字架を組み立て、病室の壁に取り付けたのだった。シュトゥムフォール医師はじめ、ナチスの医師や職員はひどく憤慨し、十字架を撤去しようとした。他のシスターたちは恐れおののいてなす術もなかったが、レスティトゥータだけは激しく抗議し、十字架を取り去ることを許さなかった。

半年後、院長の妻がその病棟で出産し、ある親衛隊員がお祝いにやって来て、壁の十字架に気付いた。彼はすぐさまその十字架を撤去するよう、また十字架を取り付けたレスティトゥータを病院から追放するよう命じた。しかしながら院長の働きで彼女は追放されることはなかった。かくしてシュトゥムフォール医師たちはレスティトゥータを追放するための理由を改めて探し求めたのだった。

1942年2月18日の灰の水曜日、ついに彼らはレスティトゥータを追いつめる機会を得た。彼女は逮捕され、民族裁判所での死刑判決を経て、1943年3月30日、斬首される。48歳だった。

### 事件の概要

1938年3月12日、親独派のオーストリア新内閣首相インクヴァルトの要請という形で10万のドイツ軍が国境を越え、オーストリアに侵入する。しかしドイツ軍は何ら抵抗を受けることなく、むしろ住民たちの歓呼の声で迎えられる。13日には新内閣はドイツ・オーストリア合併を決定し、ナチス・ドイツとオーストリアは一つの国となる。いわゆる「オーストリア併合」である。15日にはヒトラーがウィーン市内の英雄広場で市民の約1割にも相当する20万の市民の熱狂的な歓迎を受け、賞賛の声を浴びる。そして4月10日におこなわれた併合(合併)の是非を問う国民投票では20歳以上の国民の実に99.7パーセントが併合賛成の票を投じたのである。こうしたオーストリア国民の熱狂的なナチ体制への賛意をあおることになった理由の一つに教会の態度が挙げられる。

プロテスタントの教区会議議長のカウアーはオーストリアの「33万人以上のプロテスタントのナチ党员」を代表してヒトラーに祝福を送っている。数日後に発表された、教区会議の声明や、多くのパンフレットの中でヒトラーは救済者として祝福された<sup>7)</sup>。

また3月28日にはイニツァー枢機卿をはじめ、オーストリア・カトリックを代表する大司教たちの署名入りの、いわゆる「荘重な表明」が発せられ、カトリック教会は全面的にナチス・ドイツの軍門に下り、ナチスの政策が無条件に正当化されたのである。

一方でナチ体制は秘密警察を動員し、すでに3月のドイツ軍侵攻時点で数千名の反ナチスの立場を取っていた人々を逮捕していたし、その後も旧政府指導者、キリスト教社会党や社会

7) Bauer, Walter: Loyalität, Konkurrenz oder Widerstand? Nationalsozialistische Kulturspolitik und kirchliche Reaktionen in Österreich 1938-1945. In: E.Tálos/E.Hanisch/W.Neugebauer/R.Sieder(Hrsg.): "NS-Herrschaft in Österreich". Wien 2001, S.163.

民主党の要人、さらにはユダヤ人など数万人を逮捕したとされている。こうした状況の中で、元来ナチズムに否定的な態度で望み、後に実際に抵抗運動をおこなうようになった人たちの多くも、当面は新たな事態の推移を見守ろうとしたのも当然であろう。さらにドイツ軍侵攻以降、オーストリア国民の中に抵抗の雰囲気以上にドイツに期待する雰囲気が芽生えていた。ナチスの勝利の陶醉は——オーストリアにおけるプロパンガンダの影響もあり——多くの国民の心を捉えたのである。

それでも 1938 年の夏および秋以降には反ナチ抵抗運動の非合法組織が形成されていく。しかし抵抗運動参加者はドイツ本国のそれに比べると遥かに少なく、抵抗運動は困難を極める。ノイゲバウアーが指摘していることであるが、ナチスによって占領された他の国や地域では最初からナチスという明白な敵が存在し、抵抗運動は言わば国民的運動となっており、またそうした雰囲気の中でナチ協力者たちは孤立し、村八分状態だった。それに対してオーストリアではナチ協力者やナチスに期待する人々が多く、さらに密告者も多数いる中で抵抗運動をおこなわねばならなかったのである。この点で抵抗運動はナチス・ドイツに対する戦いだけではなく、オーストリア人同士の一種の市民戦争の性格を帯び、その分だけ抵抗運動は困難をきわめたのだった<sup>8)</sup>。

1941 年 6 月、ドイツ軍は宣戦布告なしにロシアに侵入し、包囲殲滅戦と電撃作戦で東部地域深く侵攻する。しかしながらドイツ軍はモスクワ近郊でロシア軍の激しい抵抗を受け、さらに思わぬ敵にも襲われる。冬の到来である。雪はドイツ軍の進撃を止めただけでなく、物資の運搬も阻んだ。寒さと食料・弾薬不足の中、次第に兵士たちの犠牲が増えていく。かくしてドイツ軍の最終勝利の夢は潰え去り、ドイツ軍東部戦線は転換期を迎えることになる。

そうした状況下の 1942 年 2 月 18 日、謝肉祭が終わり、灰の水曜日が始まった。午前 7 時にはウィーン郊外のメードリンク病院の看護婦たちの日勤が始まる。彼女たちは朝のミサと朝食を済ますと仕事に取り掛かり、レントゲン室、手術室、麻酔室などの様々な部署で夜勤の看護婦たちと交代した。

午前 9 時過ぎに突然二人の秘密国家警察がやってきて、レスティトゥータと話をしたいと申し出た。彼女は手術中だった。手術が終わるや否や二人はレスティトゥータに大逆罪容疑の逮捕状を示し、白衣のままウィーンのロザウアー・レンデの警察まで連行した<sup>9)</sup>。

「大逆罪容疑」で逮捕されるような、いかなる罪をレスティトゥータは犯したのだろうか。実はレスティトゥータは前年 12 月にメードリンクの病院を訪れていた二人の国防軍兵士から、ナチス・ドイツのためにではなく、祖国オーストリアのために闘うよう訴える以下のようなビ

---

8) Neugebauer, a.a.O., S.189f.

9) Kunzemann, Werner: Schwester Restituta. Vom Operationssaal zum Hinrichtungsraum. Verlag KIRCHE Innsbruck, Innsbruck, 1998, S.37.

ラ『兵士の歌』を受け取っていた。

### 兵士の歌

目覚めよ、兵士たち、そしてどうか  
君たちの最初の誓いを思い出して欲しい。  
君たちは生まれ育った国のため、  
オーストリアのために闘うことを誓ったのだ。  
われわれがプロイセン人に裏切られたことは  
今日では子供ですら分かっている。  
太古から続いている故郷の伝統に対して  
連中は軽蔑や嘲りしか示さない。  
年配のオーストリア人の将軍に  
伍長の男が命令しているのだ。  
そしてオーストリアの新兵たちは  
連中にとっては大砲の餌食でしかない。  
部下を罵り、虐待するために連中は  
新たな犠牲者を見出そうとしている。  
生意気なプロイセン連中はわれわれを  
すぐさま見下したのだ。  
その見返りに連中はオストマルクのレモンを  
最後の最後までしぼり取ったのだ。  
われわれの黄金や芸術の宝を連中はすぐに  
飽満経営で駄目になったナチ帝国へ運び去った。  
われわれの肉、果物、牛乳やバターは連中の  
歓迎すべき餌となった。  
われわれを解放してくれたのだ、と信じる間もなく  
連中はわれわれをすっかり略奪してしまっていた。  
名声をも無頼の輩はわれわれから盗み、  
さらにまだわれわれの血を求めている。  
弟はそれほど愚かではない、  
気を付けるがいい、弟が銃口の向きを変えてしまうのを。  
報復の日はもはや遠くない、



兵士たちよ、君たちの最初の誓いを思い出して欲しい。  
オーストリアよ！  
われわれオーストリア人は、  
全世界と平和と友好を保っていた。  
世界は今や連中の憎悪に毒され、  
連中のために世界は互いに反目し合っている。  
母親たちは震え、男たちは不安に脅え、  
天は黒く雲に覆われている。  
人類が経験した最も恐ろしい戦争が  
わが祖国の前に恐ろしげに立ちふさがっている。  
われわれは不幸や飢えの危険に、  
男たちや若者たちの大量死の危険にさらされている。  
同志たちよ、破滅をもたらす狂気さながらの  
プロイセン人の揉め事がわれわれに何の関係があると言うのだ。  
諸民族がわれわれに何をしたと言うのだ。  
われわれが武器を取るのは  
自由な祖国のために闘うためだけである。  
褐色の奴隷帝国に対して闘うのだ！  
幸福なオーストリアのために闘うのだ！<sup>10)</sup>

レスティトゥータはこのビラをレントゲン科の秘書スモラ婦人にタイプライターで口述筆記させ、複写し、さらに居合わせた同僚看護婦に『兵士の歌』を読んで聞かせたのだった。ところがその際にドアが完全に閉まっていなかったため、ナチス最員の掃除婦が盗み聞きし、そのことを病院内のナチ党員で有名だったシュトゥムフォール医師に密告したのである。密告を受けたシュトゥムフォール医師は今こそレスティトゥータに恨みを晴らす好機だとばかりに、直ちに秘密情報機関メードリンク支部にレスティトゥータを告発したのである。しかしながら理由は不明だが、その告発から2ヶ月ほど経った2月になって逮捕状が出され、逮捕されたのである。実はレスティトゥータ本人は盗み聞きされたことに気付いていた。彼女は『兵士の歌』を呼んで聞かせた2週間後に、同僚の看護婦にそのことを告げている。

「レスティトゥータは興奮してはいましたが、不安の念を抱いているようには全く見え

---

10) ebd., S.38.

ませんでした。そしてヒトラーを嘲る詩をタイプライターに口述筆記させたこと、ドアが完全に閉まっていなくて、誰かに盗み聞きされたことなどを打ち明けました。そしてさらに、あれから 2 週間もたっているのに、もう何も起きることはないでしょう、と確信を抱いている様子でした。」<sup>11)</sup>

レストイトゥータから『兵士の歌』を読んで聞かされ、事件に巻き込まれていたもう一人の修道女は不安な気持ちを抱いていたことを述べている。

「嘆願書でも出されて事件は収まったのでしょうか。それとも単に先送りされているだけなのでしょうか。」<sup>12)</sup>

レストイトゥータはしかし心の中では逮捕を覚悟していたようにも思われる。彼女は行き付けのレストラン「グスタンツル」の女主人に、自分に会えるのももう数回程度になるかもしれない、と暗に逮捕されることをほのめかしている<sup>13)</sup>。

ウィーン秘密国家警察によってレストイトゥータおよび 1941 年 12 月の出来事に巻き込まれた人物たち——修道女カエターナ、修道女アンゲリカ、掃除婦、スモラ婦人——は 5 回に渡って尋問を受ける。その際に明らかになったことは、シュトゥムフォール医師が背後で重要な役割を演じていたことである。彼はレストイトゥータがレストラン「グスタンツル」の店によくやって来ることを嗅ぎつけており、またスモラ婦人に、レストイトゥータのために口述筆記をした場合にはタイプライターのカーボン用紙を自分のために取っておいてくれるよう依頼していたのである。

秘密情報機関メードリンク支部はレストイトゥータが口述筆記させた際に使用されたタイプライターのカーボン用紙を入手し、それを元に『兵士の歌』を再現したと言う。この秘密情報機関からの依頼を受け、秘密国家警察はレストイトゥータに関する捜査を開始し、その捜査によってレストイトゥータは逮捕され、民族裁判所で裁かれることになる。ナチズム体制によって 1936 年に特別裁判所として設置された民族裁判所は、裁判所とは名ばかりの、反ナチ抵抗運動を徹底的に弾圧するための超法規的存在で、たいした証拠もないまま多くの人たちに有罪判決を言い渡し、処刑している。無罪を言い渡した場合も、釈放するのではなく、「強制収容所」送りにするか、引き続き当局の厳しい監視の元に置いたのである。

---

11) Sagardoy, P. Antonio: Gelegen und ungelegen. Die Lebenshingabe von Sr. Restituta. Verlag Christliche Innerlichkeit, Wien 2001, S.53f.

12) Beinhauer, a.a.O., S.33.

13) ebd., S.34.

民族裁判所が「有罪認定証拠」としたカーボン用紙を見る限り、鏡映文字で、しかもほとんどの文字が重なっており、詩をすべて読み取り、再現できたとはとうてい信じ難い。事実インスブルックの連邦警察本部の犯罪技術部長によれば、当時の技術レベルでは詩句を正確に再現し、元の詩句と完全に一致させて読むことはまずできなかつただろう、という<sup>14)</sup>。クンツェマンはこうした杜撰な証拠だけでなく、裁判の過程で浮上した疑問点を5点に渡って挙げている。

1. シュトゥムフォール医師は秘密情報機関メードリンク支部にレスティトゥータを告発し、さらに同情情報機関所属のカール氏にカーボン用紙からの解読を依頼したと主張しているが、シュトゥムフォール医師本人が証人として審理に呼ばれることはなかったし、「カール氏」の存在も裁判では何ら明らかにされていない。
2. レスティトゥータに『兵士の歌』を手渡した二人の国防軍兵士の消息がつかめていない。違法ビラを所有していた彼らにも当然ながら大逆罪の容疑がかかるはずなのに、彼らを捜査した形跡は見あたらない。さらにシュトゥムフォール医師は兵士たちの訪問を事前に知っていたかのごとく、彼らの訪問直前に、レスティトゥータが何か口述筆記させた場合にはカーボン用紙を取っておいてくれるよう、スモラ婦人に頼んでいる。
3. ウィーンの民族裁判所は判決内容をベルリン国防軍第三防諜機関の最高司令部宛てに報告するよう要請を受けていながら、意図的に報告をおこなっていない。その理由は国防軍による事件調査の阻止と考えられる。
4. カーボン用紙からの『兵士の歌』の複製が可能か否か判断する鑑定人の招聘は不思議なことに拒絶されている。
5. 当時のウィーンでは地下活動で様々な愛国的、平和主義的な歌が流布しており、秘密国家警察によって発見されたビラをシュトゥムフォール医師が二人の国防軍兵士を介してレスティトゥータに手渡すよう仕組んだのではないかと、との疑惑がある。しかもそのビラを紛失したことをレスティトゥータから聞かされた兵士二人は自分たちが「大逆罪」で告発されかねない、という状況にも関わらず、彼女に軽く抗議しただけで立ち去っている<sup>15)</sup>。

こうした疑問からクンツェマンはシュトゥムフォール医師と秘密国家警察によって巧妙にレスティトゥータのために罠が仕掛けられ、その罠から彼女は逃れることはできなかったのだ、と結論付けている。古参のナチ党員だったシュトゥムフォール医師が、日ごろから反ナチ的な態度のレスティトゥータを懲らしめてやろうと考え、罠をしかけたことは容易に推察される。しかし彼は判決が下されるまでは、レスティトゥータの刑はせいぜい「2, 3年だろう」と考えており、事実、裁判を傍聴した看護婦から死刑判決が下された事を知らされると「私はそん

---

14) Kunzemann, a.a.O., S.42.

15) ebd., S.43.

なことを望んではいなかったのに！」と驚いて泣き叫んだという<sup>16)</sup>。しかしながら告発者の彼とは異なり、秘密情報機関や民族裁判所はこの事件がナチズム体制を揺るがす大きな脅威になりかねないと考えたのだった。かくして民族裁判所は「見せしめ」の意味で極刑を科したと考えられる。レスティトゥータは偶然手に入れた『兵士の歌』と「ドイツ・カトリック青少年の催しが妨害された報告のピラ」の 2 枚を複写させ、『兵士の歌』の内容を二人の修道女と一人の手術助手に伝えたに過ぎないのである。そのレスティトゥータに対して民族裁判所は大逆罪を適用し、死刑判決を求めている。民族裁判所に見せしめの意図があったと考える以外には理解できない措置である。

事実ウィーン地方裁判所は当初からこの件を大逆準備罪では起訴できないと判断していた。ウィーンの検事正がベルリンの司法大臣に宛てた報告の中で刑事訴追は当然だが、「この事件は大逆罪という前提」は満たしていない、と書いている<sup>17)</sup>。さらにウィーン地方裁判所の起訴状の草稿では「国家指導部および国家の諸制度に対して憎悪と悪意に満ちた発言をおこなった」ということで起訴し、せいぜい禁固刑にしかならないような法律を適用しようとしていたことが分かる<sup>18)</sup>。しかしその後ベルリンの民族裁判所が新たに起訴状を書き直し、「大逆準備罪および利敵行為」で起訴したのである。レスティトゥータはそれに対して民族裁判所に、ピラを公に撒き散らしたわけではなく、『兵士の歌』も 3 名の同僚に読んで聞かせただけであり、その 3 名ともそのことを他の誰にも伝えてはいないので、「利敵行為も大逆の試み」にもあたらない、と異議申し立てをおこなっている<sup>19)</sup>。しかしながら民族裁判所は異議を却下し、「大逆準備罪に関して(。。。)被告人は刑法典 91 項 b の意味で国家反逆的利敵行為の罪も犯している。というのもドイツ国民が存亡をかけた苛酷な闘いをおこなっている時期に、軍事状況が極めて緊迫しているこの時期に、彼女は破壊活動によって国内の戦線を混乱させようとしたのである。そのことによって被告人は帝国の軍事的敗北を目指して実質的に働いたのであり、客観的には国民の抵抗力を萎えさせることによって利敵行為をおこなったことになる。こうした行為がもたらす結果は、知性を備えた被告人には明らかであるにもかかわらず、躊躇することなく目をつむったのである。なぜなら被告人は反国家的な態度でドイツの敗北を望んだからである。そのことによって刑法典 91 項 b による犯罪の内的、外的構成要素が満たされることになる」。

かくしてレスティトゥータに「国家反逆的利敵行為および大逆準備罪で死刑、並びに終身名誉剥奪」の判決が下されたのである<sup>20)</sup>。

ナチ党宰相官房長官ボルマンは直々にこの判決に関してコメントし、このボルマンの決定に

---

16) Sagardoy, a.a.O., S.76.

17) Kunzemann, a.a.O., S.45.

18) ebd.

19) ebd., S.46ff.

20) ebd., S.51.

よってレステイトゥータの恩赦の道も閉ざされ、死刑が確定したのだった。このボルマンのコメントには「見せしめ」という言葉が使用されている。

「(。。。) ヘレーネ・カフカの犯罪行為は極めて危険なものであった。たとえ彼女が二人の修道女に『兵士の歌』を読んで聞かせた事実しか確認されえないとしてもである。またそのピラをコピーしたことも、彼女がそれをもっと広範な人々の手に入れさせようとの意図を有していたことを物語っている。こうした理由から言い渡された死刑判決を恩赦をもって懲役刑に変えることには同意できない。むしろ見せしめの理由から死刑執行が必要だと思われる。」<sup>21)</sup>

ボルマンは死刑執行を「見せしめ」の理由から不可欠だと見なしていたが、一方でナチ体制はレステイトゥータの死が逆の効果を生むことも恐れていた。1942年12月の帝国保安本部からの手紙の中に以下のような懸念が示されている。

「埋葬のためカフカの遺体を遺族に引き渡すことを国家警察ウィーン支部は躊躇している。処刑された彼女が属していた修道院の修道女たちに復讐の念を抱かせるのではないか、さらに遺体を引き渡した場合に、体制にとって望ましくない宣伝活動が生じたり、処刑された彼女を殉教者として崇める事態も懸念されるからである。」<sup>22)</sup>

しかしながらこうした懸念は実際には無用だった。というのも修道院側はレステイトゥータのような修道女を抱えていたことでナチ体制による報復措置を受けるのではないかと恐れていたからである。修道院長は動揺する修道女たちに対し、ひたすら沈黙すること、レステイトゥータのために祈ることだけを求めている。それはレステイトゥータの件が修道院にとって決して歓迎されるものではなかったことを物語っている。

このような状況の中でレステイトゥータの姉、かつてメードリンク病院で働いていた医師、さらにはイニツァー枢機卿からも恩赦の願いが提出されるが、いずれも退けられてしまう。ベルリンのローマ教皇大使館も恩赦に向けて働いているが、日の目を見ることはなかった。

### 獄中のレステイトゥータ

獄中のレステイトゥータは当初は自分は間違ったことをしたのではないかと、自分の行為によって修道院に迷惑をかけ、修道女たちに厄介な問題をもたらしたのではないかと、自分を見捨

21) ebd., S.59. なお下線は筆者による。

22) ebd., S.60.

てられたのではないかと、思い悩んでいる。初めて味わう孤独の中でレスティトゥータは苦悩していた。

そんな折りに届いた修道院長や修道女たちからの手紙に対してレスティトゥータは喜びに満ちた返事を書き送っている。

「愛する善良なる修道院長様！

今週私はあなた方から 3 通の手紙を受け取りました。それがどれほど嬉しかったことでしょう、心から感謝します。明日は私たちの愛するフランシスクス祭を祝われるのですね。修道院へ戻りたいとの想いはとても強いのですが、何ということはありません。牢の格子の背後でも私からこの素晴らしい、愛する祭りの喜びを奪うことはできないのですから。というのも善なる父フランシスクスはどこにしようとも子供たちのことを、私のことを気にかけて下さるのですから。」<sup>23)</sup>

修道院との繋がりが消えてはいないこと、自分が修道女たちから忘れられてはいないことをレスティトゥータは大いに喜んでいる。またこの手紙からレスティトゥータの信仰心が獄中でも何ら変わりのないことが見て取れる。監獄に収容された際もレスティトゥータはロザリオと聖務日課だけは決して手放すことはなく、まさにロザリオと聖務日課を糧に信仰の中で生きていたのである。しかしながら一方でレスティトゥータは近いうちに修道院に戻れるのではないかとの楽観的な予測、また戻りたいという期待も抱いていた。妹アニーが膝の手術を受けた際に彼女は書いている。

「一番好ましいのは、メードリンクの病院でシュテアー院長に手術してもらうことです。私がそれに立ち会えるまで待つてくれれば、なお良いのですが。」<sup>24)</sup>

さらには「ここを出て仕事に復帰するために、可能であれば私はあらゆる手段を講じたいと思います。しかしここでは自由の 때가告げるまで待つて忍耐が求められています。そしてその時が間もなくくることを神はお望みである、そう私は期待しているのです」とも書いている。<sup>25)</sup>

しかし獄中生活が長くなるにつれ、次第にレスティトゥータに変化が見られるようになる。彼女は神の意志を悟り、神が自分に「十字架」を背負う使命を与えているのだと、感じ始める。そして民族裁判所での死刑判決が下された直後の 1942 年 11 月、レスティトゥータは修道院

---

23) ebd., S.53.

24) Sagardoy, a.a.O., S.66.

25) ebd.

長に宛てた手紙の中で神の御心に従い、死をも受け入れる旨を述べるまでになる。

「修道院長様、あなた様にも他の修道女と同じような悲しみを与えてしまったことを、本当に申し訳なく思います。でもどうか悲しまないで下さい。というのも神のなされることは正しいことだからです。私自身はいかなる罪も犯したとは思っていません。でも自分の生命を捧げねばならぬのなら、喜んで犠牲となります。というのも私は救世主の元へ慈愛に満ちて受け入れられたいと望んでいるからです。」<sup>26)</sup>

さらに処刑される一ヶ月前にも再度修道院長に宛てて神の意志による死に向かっていることを告げている。

「私は、私の十字架の道がまもなくゴルゴダの丘の上に達するのではないかと、毎日待っています。どうなるにせよ、聖なる意志が生じますように。この聖なる意志の中に私の慰めのすべてがあるのです。だから私は毎日<イエス、ファザー>と言っています。」<sup>27)</sup>

こうしてレスティトゥータは神の意志に従い十字架を担ってゴルゴダの丘を目指して進んで行く。

「私は丘に向かって喜んで登っていきます（。。。）それ以上の何を望むというのでしょうか（。。。）」<sup>28)</sup>

「ゴルゴダの丘」へ向かって登っていくという言葉から、レスティトゥータが最初から丘の頂きにいた訳ではないこと、すなわち最初から聖なる人間として生まれた訳ではないこと、神の意志を悟り、辛く長い道程を経て、徐々に神の元へ近づいていったことが分かる。今やレスティトゥータは処刑に際しても「私は祝祭に出かけて行きます、天国へまいります」と答えるのである<sup>29)</sup>。

こうしたレスティトゥータは当然ながら多くの囚人の注目を浴び、彼女たちの模範となり、嘆きの壁となり、希望の化身となっていく。他の囚人たちからはレスティトゥータの名前を短

---

26) Widerstand und Verfolgung in Niederösterreich 1934-1945, hg.vom Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes, Band3, Wien, 1987., S.236.

27) Sagardoy, a.a.O., S.86.

28) Fux, Ildelfons: Schwester Restituta. Auf dem Weg zur Heiligkeit. Verlag KIRCHE Innsbruck, Innsbruck, 1998, S.70.

29) ebd.

縮した「レストゥル」と、愛と尊敬の念をこめて呼ばれ、彼女たちの暗い監獄の中の光、暗く沈み勝ちな心の中の光のような存在となっていく。囚人たちはレストイトゥータの信仰心に打たれ「あのような信仰心 (。。。),それはもう二度とは存在しない」「彼女は私がこれまでに知っている最も信仰心の強い女性、信仰心の深い女性でした」と賞賛した<sup>30)</sup>。信仰に基づく慈愛に満ちた「レストゥル」は信者か否かを問わず同じ態度で臨み、ユダヤ人であっても差別することとはなかった。幾つかのエピソードがそのことを裏付けている。

囚人たちは慢性的な栄養不足やビタミン不足に悩まされていたが、ある身重の囚人のためにレストイトゥータは自分の食事のジャガイモを秘かに囚人服の下に隠し、その女性に与えたこともあった。その身重の囚人は生まれてきた子供に「レストイトゥータ」という名前を付けようとしたが、周囲から危険すぎると忠告され、仕方なくレストイトゥータの洗礼名だった「ヘレーネ」と命名したのだった。この囚人はレストイトゥータが処刑された知らせを受けた時「あの方は聖人だった！」と叫んでいる<sup>31)</sup>。また自分の子供を飢え死にさせた囚人が他の囚人たちから、今度は自分が飢え死にすべきだと非難され、食事を取り上げられた時も、レストイトゥータはさっさと幼児殺しの囚人に食事を与えたのだった。また監獄内で当時はオーストリア人にしかバターや牛乳は配給されなかったが、レストイトゥータは自分に配られたバターや牛乳をユダヤ人や他の外国人に分け与えている。ある共産主義者の囚人は死刑判決が言い渡された夜にレストイトゥータから「私は死なねばならないから、泣いているではありません。いえ、私は嬉しさのあまり泣いているのです。あなたにもう一度会えたこと、あなたが生きていける嬉しさのあまり泣いているのです」と告げられ、感激のあまりレストイトゥータと抱擁し合ったことを伝え、さらに「(レストイトゥータは)言葉では表現できないほど偉大でした。奇跡の人です、聖人です」と述べている<sup>32)</sup>。さらに他の囚人もレストイトゥータに奇跡を起こす聖なる特性を見ている。二度も恩赦の願いが取り下げられていた囚人はレストイトゥータの奇跡を予言する言葉を覚えている。レストイトゥータは処刑前に「私が無事に主の御許に到着したとき、私がおこなう最初のことは、あの年老いたツィンメル婦人を自由の身にしてくれるよう、主にお願ひすることです」と述べていたが、何と彼女の処刑 2 日後に、それが実現し、当のツィンメル婦人だけでなく、釈放を告げた看守も驚いている<sup>33)</sup>。

レストイトゥータの 13 ヶ月にわたる獄中生活は彼女が神に一層近づき、まさに聖女となるための「修練期」であったと言える。

1943 年 3 月 30 日の午前中に数名の司法官のいる前でレストイトゥータに再度死刑判決が

---

30) ebd.

31) ebd., S.78.

32) ebd.

33) ebd., S.77.



読みあげられ、同日の夕刻の18時に処刑される旨が告げられる。レスティトゥータは処刑室に近い特別の独房へ入った。彼女の最後の数時間に関しては監獄付き神父が報告している。監獄内礼拝堂から密かに彼女のために聖体が持ち運ばれ、彼女は修道会の請願を新たにおこなった。囚人服の代わりに彼女は白い紙の下着と木のサンダルを受けとる。18時20分頃、ギロチンにより処刑される。処刑に立ち会った人物は彼女の最後の言葉を報告している。

「救世主のために私は生きてきました。そして救世主のために私は死ぬつもりです。」<sup>34)</sup>

レスティトゥータが処刑されるまで所持していた聖務日課の中にメモが残されている。メモには聖母マリアを称える歌詞「聖母様、どうか私を見捨てないで下さい。私の目が死の中でいつか光を失うまで」と「主よ、あなたのお側に」の歌が書き込まれていた。さらに鉛筆書きで「死の前にこの二つの歌をうたいました。間もなく全てが終わります。そして私は救世主と聖母のお側にいることとなります」と添えられていたという<sup>35)</sup>。

### 列福・列聖へ

レスティトゥータはその不幸な死後、ローマ法王によって「聖者」に列せられている。列福・列聖に至る審理は実に厳格、かつ慎重におこなわれるという。たとえば教会の列福・列聖審理を終える前に、候補となる人物の墓に詣でることは許されないし、審理の前および審理中は、当該の人物の氏名は公表されず、単に「神のしもべ」と呼ぶに留める。あくまでも公平に、慎重に審議するためである。

列福・列聖審理には3段階の審理があるという<sup>36)</sup>。第1の審理は司教区レベルでの司教の「提起審理」と呼ばれるものである。第2の審理は「試験審理」と呼ばれ、バチカンの「列福・列聖審理のための聖省」でおこなわれる。そして最後の審理が法王による「公的承認」である。第1の「提起審理」は特に功績のあったキリスト教徒が、死後にも多くの信者から慕われ、伝記が書かれたり、故人の生家や生誕地、あるいは故人の墓詣でなどで話題となり、そうした中からその人物を列福・列聖させたい、との提案を自分たちの司教区の司教に要請する。司教は要請が妥当だと認めると、申請人を任命し、記録文書などを用いて、その人物に関する可能な限り完全な伝記を作成させる。その後、バチカンの「列福・列聖のための聖省」に伝記を始めとする必要書類を揃えて申請し、聖省の同意を受けた後に審理が開始される。

---

34) Sagardoy, a.a.O., S.100.

35) Fux, a.a.O., S.72.

36) Kunzemann, Werner: Der lange Weg zur Seligsprechung. Verlag KIRCHE Innsbruck, Innsbruck, 1998, S.85.

この審理のため司教は独自の法廷を招集し、候補者の生涯や業績、殉教の経緯などに関するあらゆる資料を調査・研究し、候補者が列聖・列福に値するかを審議する。

司教による「提起審理」が終わる頃になって初めて、候補者の亡骸を発掘し、役所の調査、及び他の墓地への移送をおこなうのが普通である。またこの遺骨発掘には医学専門家も含まれる。

「提起審理」終了後、封印された審理書類はバチカンの「列福・列聖審理のための聖省」の枢機卿に引き渡される。「試験審理」が開始されるのである。提出された申請書類は神学的、歴史的知識を有する専門家らによる「神学者委員会」によって慎重な調査がおこなわれる。

「神学者委員会」メンバーは「賛成」「反対」「保留」の決定を下し、委員の3分の2が賛成すれば、列福・列聖が認められることになる。その後は全資料が委員会の結論及び投票結果と共に枢機卿や司教たちからなる委員会へ送られる。そしてその結果が枢機卿や司教にも同意されて初めて法王に報告される。報告を受けた法王は列福・列聖を認める教令の公表を命ずる。これが法王による「公的承認」で、これによって列福・列聖が正式に認められたことになる。この教令の公表は教皇座の機関紙でおこなわれる。

ではレスティトゥータの場合にはどのような経緯で列福・列聖が認められることになったのだろうか。

戦後初めて「レスティトゥータ」のことを公に取り上げて人々に知らせたのは1946年にウィーンでおこなわれた共産党の選挙放送だったという<sup>37)</sup>。

しかしながらこの時期にレスティトゥータのことを人々に鮮明に思い出させることになったのは1948年におこなわれたシュトゥムフォール医師に対する裁判である。1946年6月にザルツブルクで逮捕された彼は1948年8月の公判でこう答えている。

「私はこの事件では秘密情報機関メードリンク支部に義務のため告発しました(。。。)後にレスティトゥータがこの件で死刑判決を受けたことを耳にしました(。。。)武装SSに所属している者として私は、この件を担当部局に取り次ぐ義務を感じていたのです。」<sup>38)</sup>

シュトゥムフォール医師は1948年11月、禁固5年の有罪判決を受ける。

この裁判の様子はウィーンの幾つかの新聞に掲載され、レスティトゥータのことが改めて人々の記憶に蘇ったのである。彼女が所属していたハルトマン修道院は、生前に彼女自身が医師のことを許していたことを考慮し、被告人に穏便な刑を科すようにとのコメントを出してい

---

37) Fux, a.a.O., S.78.

38) Kunzemann, a.a.O., S.63.

る<sup>39)</sup>。それから10年後の1958年、シスター・マリア・ベネディクタ・カップによってレスティトゥータの手紙も引用した、初めてのレスティトゥータに関する自伝的メモが出版される。しかしまだ列福・列聖を求める動きは見られなかった。ハルトマン修道院においても何ら動きはみられなかった。

さらに20年後の1978年、転機が訪れる。3月にラジオ放送でレスティトゥータのことが紹介され、さらに9月には連邦大統領によって彼女にオーストリア解放の功績を称えて死後榮譽章が賦与されたのである<sup>40)</sup>。聖ガブリエル伝道本部のシュレーダーは修道院長オーバーミュラーの要請を受けて情報の収集、記録文書の作成を開始したが、それは列福・列聖を求める司教区の「提起審理」を視野に入れてのことだった。さらにオーストリア抵抗運動記録文書館で1975年にレスティトゥータに関する重要な研究が発表されるなど、オーストリアにおける国家社会主義の研究および抵抗運動の研究がこの間に大いに進展していた。またベネディクト修道女ケンプナーが『ヒトラーの法廷に立たされた司祭たち』、『鉤十字下の修道女たち』という論文を発表し、ナチスに迫害された司祭や修道女たちへの関心を呼ぶことになった<sup>41)</sup>。1981年にはメドリンク病院にレスティトゥータ祈念碑が作られ、シュレーダーは「提起審理」に向け証言者たちへの書類による質問を開始した。彼は1984年に亡くなり、「提起審理」に向けた歩みが一時鈍ることになる。

4年後の1988年11月、ウィーンのグレール大司教の努力、さらにハルトマン修道院の努力が実り、同修道院の礼拝堂で「提起審理」が厳かに開始された。また翌年の1989年3月にレスティトゥータの墓が開かれ、遺骨がウィーン大学法医学研究所で鑑定を受けるが、別人の骨であることが判明する。なぜそのようなことになったのか、レスティトゥータは実際には一体どこに埋葬されたのかは、今もって不明である。

1990年3月、最後の審理がおこなわれた後、「試験審理」のために資料がバチカンへ送られる。1997年11月19日、レスティトゥータの親族やハルトマン修道院の依頼を受けたウィーン地方裁判所は、ナチスの民族裁判所によって下されたレスティトゥータに対する有罪判決を無効とする決定をおこない、レスティトゥータは完全に名誉を回復する。そして同月25日、バチカンの「神学者委員会」は全会一致でレスティトゥータの列福・列聖を認める。半年後の1998年6月21日、かつてオーストリアに進駐したヒトラーが熱烈な歓迎を受けた同じ英雄広場で、法王ヨハネス・パウロ二世によってレスティトゥータの列福・列聖が高らかに告げられたのである。

---

39) Fux, a.a.O., S.78.

40) ebd., S.79.

41) ebd.

## お わ り に

以上レスティトゥータに関して述べてきたが、オーストリアにおける反ナチ抵抗運動との関わりで言えば、彼女には特定の抵抗運動グループとの関わりはない。ひとえに信仰故とは言え、彼女が日常的に反ナチスの態度を取り、病院内の十字架を巡る事件でも毅然とした態度で意志を貫いた事実は、彼女が反ナチ抵抗運動をおこなった一人であることを物語っている。ナチ体制がレスティトゥータの事件を深刻に受けとめ、影響拡大を恐れ、「見せしめ」のために極刑を与えたのはそれを逆の立場から物語るものである。

聖女として蘇ったレスティトゥータ、ウィーンの幾つかの教会には彼女を称えるためのブロンズ像が飾られ、ウィーン 20 区のブリギッタ広場にある教会には「レスティトゥータ祭壇」まで飾られている。1992 年にはウィーン 5 区に「マリア・レスティトゥータ館」と命名された市営住宅が建設され、彼女がかつて修道院派遣の看護婦として働いていた病院がある通りは 1995 年以降、「シスター・マリア・レスティトゥータ小路」と改称、さらに 2000 年には 20 区の地下鉄ハンデルスカイ駅前が「マリア・レスティトゥータ広場」と命名されている。

2003 年、レスティトゥータが子供時代を過ごしたウィーン 20 区ブリギッテナウのギムジウム生徒たちが中心となってレスティトゥータを描いたミュージカル「レスティトゥータ——ナチズムの暴力に抗した信仰」を上演し、CD も作られるほどの大きな反響を呼んだ。このことは、聖人となったレスティトゥータの今日的意義、現代の若者にとってのレスティトゥータの魅力と意義とを考える上で一つの参考となるものである<sup>42)</sup>。

---

42) Sagardoy, a.a.O., S.118.